

## 大学生の健康意識の分析的検討

— 体育系及び文科系専攻学生の場合 —

藤 沢 邦 彦

### The analysis for health consciousness of the students

— Case of the physical education and literary course —

Kunihiko FUJISAWA

This survey was carried out for the purpose of grasping the health consciousness in students (physical education course and literary course) in detail. The students of physical education course and literary course were asked their image-evaluation as to the physical condition (11 items), to the mental condition (17 items), and to the social condition (10 items), in comparison with the standard of the general students. The subjects of inquiry were 191 students (male: 137, female: 54) of physical education course and 284 students (male: 197, female: 87) of literary course. The results are summarized as follows;

1. The students of the physical education course have remarkably higher health consciousness about the physical aspect than the students of the literary course.
2. Male students of the physical education course have higher health consciousness about the mental aspect than the students of the literary course, but female students in the both courses are not different in this respect.
3. The students of the physical education course have higher health consciousness about social aspect than those of the literary course.

So, it is necessary for the students in the literary course to be changed in their lower and unbalanced health consciousness by the educational means.

Key words : Health education, Health consciousness, College education

#### I. 緒 言

大学生が自分の「健康」に対して、どのような意識を持っているかということ明らかにすることは、彼らの健康実態を把握することと共に、大学保健教育や保健管理を行う上で必要である。すなわち、彼らは自分が現在持ち合わせている健康意識によって健康について考え、行動しているため、保健教育において健康認識を高めたり、保健管理において健康実践を促そうとした場合、まず

彼らが現在持ち合わせている健康意識を働き掛けの出発点としなければならない。そこで指導者が保健教材や健康実態に対応させ得る形での健康意識の把握が必要となる。

そのような健康意識の把握は、健康意識を内容領域と水準の面から分析的に捉えることによって、可能と考えられる。

今までも、健康意識の内容領域の分析に近いものとして、「健康観」の調査や各種の「自覚症状」

調査が行われているが、健康観の調査<sup>(3,8)</sup>は、自由記入の回答を分析したものであり、分析に用いられた内容領域のカテゴリが曖昧なために、漠然とした傾向が示されているにすぎない。また、「自覚症状」調査は、CMI健康調査のように多くが疾病意識の調査であり、調査項目は心身の弱点を問うものが多く、良好さの自覚とも言える健康意識の面からみると片寄ったものである。

健康意識の水準の分析に関連するものとして、「健康度」調査等<sup>(4,6)</sup>があるが、これらは総合的な自覚的健康レベルのみを問うものであり、この結果から具体的示唆は得られない。しかし、この類の調査結果が、同一対象における健康意識の分析的把握を集約したものと比較検討されるならば、より多くの示唆が得られるであろう。

そこで、保健教育を受講している大学生が自分の「健康状態」に対してどのような意識を持っているかを明らかにするために、新たな調査を試みた。その調査は、1)健康意識を身体面、精神面、社会面の三側面から適確な内容領域に分割、区別して調査できること、2)その内容領域ごとに意識の水準が調査できること、3)集団において一斉調査が可能であり、回答が容易であること、4)個人間及び集団間で相対的な比較検討が可能であることを配慮して独自に作成した。

本研究では、この調査法によって、一般的な文科系専攻学生と筆者等が従来から健康意識が高いことを指摘してきた<sup>(2)</sup>体育専攻学生を対象に調査を行い、両専攻学生の健康意識の実態及び相違点を分析的に比較検討した。その結果、両専攻学生の健康意識の特徴を従来より詳細に知ることが出来たので、報告する。

## II. 研究方法

体育専攻学生と一般的な文科系専攻学生の健康意識の実態を分析的に把握するため、次のような調査を実施した。

1. 調査対象：都内H私立大学文科系一年生284名(男子197名,女子87名)および筑波大学体育専門学群一年生191名(男子137名,女子54名),合計475名(男子334名,女子141名)。

調査対象としたH大学は総合大学であり、いわゆる東京6大学の一つである。特異性のない一般的な大学である。また、調査両大学の所在が異なること等は、調査内容の「社会面」に

反映することを前提としている。

2. 調査時期：平成元年9月
3. 調査方法：質問紙法(記名)による一斉調査
4. 調査項目：健康意識を分析的に問うための選択肢を以下のように設けた。

健康の身体面として「体力」、精神面として「精神力」、社会面として「境遇」の3つの大項目を設け、次いでそれぞれの具体的内容を示す項目を合計38項目設定した。

- 1)「体力」に関する項目：①筋力 ②持久力 ③敏捷性 ④平衡性 ⑤体格 ⑥調整力 ⑦柔軟性 ⑧巧緻性 ⑨環境に対する適応力 ⑩病気に対する抵抗力 ⑪疲労からの回復力
- 2)「精神力」に関する項目：①意志力 ②決断力 ③行動力 ④集中力 ⑤持続力 ⑥記憶力 ⑦知識力 ⑧感受性 ⑨心の安定 ⑩自制心 ⑪適応力 ⑫協調力 ⑬指導力 ⑭理解力 ⑮想像力 ⑯洞察力 ⑰正義感
- 3)「境遇」に関する項目：①学習に関する諸条件 ②住居に関する諸条件 ③友人関係における諸条件 ④課外活動における諸条件 ⑤経済的な面 ⑥通学に関する諸条件 ⑦家族関係における諸条件 ⑧娯楽に関する諸条件 ⑨医療に関する諸条件 ⑩環境に関する諸条件

次に、各項目ごとに、「世間一般の同世代の人」という表現で「一般の大学生」との比較による相対的レベルを意味するイメージの選択肢を4つ、「○」、「×」、「△」、「?」を設け、一つを選択させた。

なお、項目の設定については、同質の対象に対して行った、「体力・精神力」及び「健康生活に必要な条件」についての自由記入式のアンケートの回答を基礎に、一部関連文献<sup>(1,5,7,9,5170)</sup>から選び出して独自に作成した。

また、イメージでの回答を求めたのは、答え易さを狙ったものであり、○のイメージは「一般の大学生より自分は優れている」と考えた者、△のイメージは「一般の大学生並みである」や「普通である」と考えた者、×のイメージは「劣っている」と考えた者、?のイメージは「言葉の意味が分からない」者や「判断がつかない」者が、それぞれ選択するであろうと想定した。

## III. 結果並びに考察

調査の結果、健康の三側面(身体、精神、社会)

を中心に検討すると、以下の通りである。

1. 身体面について

大学生自身の、身体面の健康状態に対する意識を捉えた結果がTable 1である。

この意識は、「体力」に関する11項目について、「一般の大学生」を基準にして、それらの優劣をイメージ的に比較させることによって、捉えたものである。

男子の場合、回答パターンにおいて、体育系学生と文科系学生の間にはっきりとした相違(カイ2乗検定、以下同様)がみられた。体育系の回答パターンは、「柔軟性」を除く10項目において、「優れている」が最も多く、次いで「普通」「劣っている」「わからない」の順であるが、文科系では、「持久力」と「柔軟性」及び「環境に対する適応力」を除く8項目において、「普通」が最も多く、次いで「優れている」「劣っている」「わからない」の順である。

項目別に両専攻の特徴をみると、体育系男子では、その専攻の特性から当然と思われるが、全項目にわたり優位意識が高く、特に「筋力」と「調整力」では、優れているとした者が70.8%と65.0%で多かった。しかし、「柔軟性」は他項目に比べてやや少ない傾向にあり、優れていると答えた者は32.1%であった。文科系男子では、「持久力」と「柔軟性」に劣っていると答えた者が、42.1%と45.7%であり、他項目に比べて多かった。また、「環境に対する適応力」が優れていると答えた者は41.5%であり、これは全項目中で優れていると回答された最高値であると共に、唯一体育系と同じ回答パターンであった。

両専攻の男子を比較すると、優れていると答えた者の占める割合では、「柔軟性」の項目を除く10項目において、体育専攻学生の方が文科系専攻学生より有意(百分率の差の検定、以下同様)に多かった。一方、劣っていると答えた者の占める割合では、全11項目共文科系学生が有意に多かった。

女子の場合、回答パターンは、男子の場合と類似した傾向にはあるが、両専攻共やや多様な回答パターンがみられ、専攻差が有意である項目は6項目だけであった。体育系女子は「敏捷性」「柔軟性」「巧緻性」の項目において、「普通」と回答した者が最も多く、次いで「優れている」「劣っている」「わからない」の順であるが、他の8項目は、「優れている」「普通」「劣っている」の順であった。文科系女子では、「普通」の回答が最も多かった項目が8項目あったが、その次に多い回答が「優れている」と「劣っている」が各4項目ずつであった。「柔軟性」は劣っていると答えた者が最も多く、次いで「普通」「優れている」の順であり、「環境に対する適応力」「病気に対する抵抗力」の項目は、その逆順であった。

項目別に両専攻の特徴をみると、体育系女子では、「筋力」が優れていると回答した者が84.9%を占め、男子以上の割合であった。次いで「環境に対する適応力」が67.9%と多かった。逆に優れているとの回答が少なかった項目は「巧緻性」33.3%、「柔軟性」35.2%であった。特に「柔軟性」については、劣っていると答えた者も22.2%おり、男子と同じように、全項目中で「劣っている」回答の最高値であった。文科系女子では、優れてい

Table 1 Health Consciousness — Physical Aspect —

(%)

	男 子								X <sup>2</sup>	女 子								X <sup>2</sup>
	優れている		普 通		劣っている		わからない			優れている		普 通		劣っている		わからない		
	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科		体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科	
筋 力	70.8	30.5	22.6	41.1	5.1	28.4	1.5	—	**	84.9	19.5	13.2	50.6	1.9	29.9	—	—	**
持 久 力	59.1	27.9	29.9	28.4	8.8	42.1	2.2	1.5	**	59.3	29.9	31.5	35.6	9.3	34.5	—	—	**
敏 捷 性	53.3	37.6	40.1	40.1	3.6	20.8	2.9	1.5	**	48.1	24.1	50.0	43.7	1.9	31.0	—	1.1	**
平 衡 性	56.9	36.5	37.2	46.7	5.1	14.2	0.7	2.5	**	44.4	29.9	42.6	49.4	3.7	13.8	9.3	6.9	
体 格	55.5	24.9	27.0	43.7	14.6	31.0	2.9	0.5	**	59.3	35.6	24.1	46.0	11.1	13.8	5.6	4.6	*
調 整 力	65.0	26.9	27.0	47.7	5.1	21.3	2.9	4.1	**	52.8	31.0	35.8	42.5	11.3	23.0	—	3.4	*
柔 軟 性	32.1	24.9	42.3	28.4	22.6	45.7	2.9	1.0	**	35.2	27.6	40.7	34.5	22.2	36.8	1.9	1.1	
巧 緻 性	51.8	23.9	38.7	50.8	5.8	19.3	3.6	6.1	**	33.3	11.5	50.0	54.0	13.0	26.4	3.7	8.0	**
環境に対する適応力	58.4	41.5	34.3	40.5	3.6	14.4	3.6	3.6	**	67.9	57.5	20.8	29.9	9.4	11.5	1.9	1.1	
病気に対する抵抗力	57.7	34.0	35.0	44.2	5.8	18.3	1.5	3.6	**	58.5	42.5	24.5	37.9	11.3	18.4	5.7	1.1	
疲労からの回復	56.9	21.3	33.6	46.2	8.0	28.4	1.5	4.1	**	46.3	38.4	40.7	39.5	9.3	19.8	3.7	2.3	

○体育系：男子N=137, 女子N=54 ○文科系：男子N=197, 女子N=87

\*P<0.05 \*\*P<0.01

るとの回答者が多かった項目は、「環境に対する適応力」57.5%、「病気に対する抵抗力」42.5%、「疲労からの回復力」38.4%といった体力としてもやや漠然とした項目であった。一方劣っているとの回答が多かった項目は「柔軟性」36.8%、「持久力」34.5%、「敏捷性」31.0%、「筋力」29.9%であった。

両専攻の女子を比較すると、全般的に体育系が優れていることは当然であるが、項目ごとに「優れている」者の占める割合を比較すると、体育系学生が有意に多いのは11項目中「筋力」「持久力」「敏捷性」「体格」「調整力」「巧緻性」の6項目だけであった。逆に「劣っている」者の占める割合を比較すると、文科系学生が有意に多いのは「筋力」「持久力」「敏捷性」「平衡性」「巧緻性」の5項目だけであり、男子の場合とはかなり傾向が異なっていた。すなわち、女子学生の場合は、体育系と文科系における身体面に対する意識の差が、男子より少ない。

また、両専攻、男女において、「柔軟性」が「劣っている」者が他の全ての項目より多かったことについては、近年文部省の体力診断テストにおいて指摘されている「柔軟性」の低下傾向とも併せて、検討する必要があると思われる。

2. 精神面について

大学生自身の、精神面の健康状態に対する意識

を捉えた結果がTable 2である。この意識は、「精神力」に関する17項目について、「一般の大学生」を基準にして、それらの優劣をイメージ的に比較させることによって、捉えたものである。

男子の場合、回答パターンにおいて、体育系と文科系学生の間には差がみられたのは17項目中8項目だけであった。この8項目は、「意志力」「決断力」「行動力」「集中力」「持続性」「適応力」「指導力」「理解力」であり、体育系学生の回答パターンはいずれも「優れている」者の占める割合が最も高く、次いで「普通」「劣っている」「わからない」の順であった。一方、文科系学生の回答パターンは、8項目中「適応力」と「持続力」を除く6項目では「普通」の者が最も多く、ついで「優れている」「劣っている」「わからない」の順であった。「適応力」は体育系と類似したパターンであったが、「持続力」は「優れている」と答えた者も少なかった。他の項目の回答パターンは、両専攻共、「知識力」「感受性」「自制心」「想像力」「正義感」の5項目が「優れている」「普通」「劣っている」の順であり、「記憶力」「心の安定」の2項目が「普通」「優れている」「劣っている」の順であった。「協調力」と「洞察力」は、体育系は「優れている」が最も多く、文科系「普通」が最も多かった。

項目別に両専攻の特徴をみると、体育系男子で

Table 2 Health Consciousness — Mental Aspect —

	男 子								女 子								X <sup>2</sup>	
	優れている		普 通		劣っている		わからない		優れている		普 通		劣っている		わからない			
	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科		
意 志 力	53.3	38.1	37.2	38.1	9.5	20.3	—	3.6	***	51.9	39.5	46.3	38.4	1.9	20.9	—	1.2	*
決 断 力	41.6	25.9	40.9	45.7	16.1	24.9	1.5	3.6	*	31.5	25.3	44.4	40.2	20.4	34.5	3.7	—	
行 動 力	47.4	32.5	41.6	43.1	9.5	22.8	1.5	1.5	***	48.1	29.1	48.1	59.3	3.7	10.5	—	1.2	
集 中 力	51.8	33.0	38.7	41.1	8.8	23.9	0.7	2.0	***	57.4	35.6	35.2	51.7	5.6	11.5	1.9	1.1	
持 続 力	42.3	22.4	40.9	37.2	16.1	37.8	0.7	2.6	***	52.8	26.4	34.0	42.5	11.3	31.0	1.9	—	***
記 憶 力	33.6	39.6	53.3	45.2	11.7	12.7	1.5	2.5		27.8	44.8	55.6	37.9	13.0	14.9	3.7	2.3	
知 識 力	43.8	50.3	38.0	33.0	15.3	13.2	2.9	3.6		31.5	50.6	51.9	39.1	14.8	10.3	1.9	—	
感 受 性	59.1	54.1	26.3	31.6	9.5	9.7	5.1	4.6		63.0	61.6	22.2	30.2	9.3	7.0	5.6	1.2	
心 の 安 定	36.0	31.1	47.1	39.3	24.0	24.0	2.9	5.6		22.6	32.6	50.9	33.7	20.8	31.4	5.7	2.3	
自 制 心	51.5	45.1	33.8	29.2	11.8	22.1	2.9	3.6		57.4	48.3	31.5	36.8	9.3	13.8	1.9	1.1	
適 応 力	58.8	45.1	34.6	39.5	5.1	12.3	1.5	3.1	*	60.4	53.5	34.0	33.7	5.7	11.6	—	1.1	
協 調 力	47.1	29.1	38.2	38.3	11.8	21.4	2.9	11.2		32.1	26.4	54.7	46.0	7.5	20.7	5.7	6.9	
指 導 力	41.9	17.3	41.2	45.9	15.4	33.2	1.5	3.6	***	35.8	19.5	47.2	41.4	13.2	34.5	3.8	4.6	*
理 解 力	57.4	41.8	34.6	45.4	6.6	8.2	1.5	4.6	*	32.1	40.2	60.4	55.2	3.8	2.3	3.8	2.3	
想 像 力	55.9	52.6	36.8	35.7	5.9	9.2	1.5	2.6		46.2	66.7	36.5	29.9	13.5	3.4	3.8	—	***
洞 察 力	50.7	39.8	42.6	45.9	5.1	9.7	1.5	4.6		41.5	41.4	45.3	46.0	9.4	10.3	3.8	2.3	
正 義 感	52.6	42.6	36.3	39.0	7.4	11.8	3.7	6.7		57.7	43.7	30.8	43.7	1.9	8.0	9.6	4.6	

○体育系：男子=137, 女子N=54 ○文科系：男子N=197, 女子N=87

\*P<0.05 \*\*\*P<0.01

は、優れていると答えた者が多い項目として、「感受性」59.1%、「適応力」58.8%、「理解力」57.4%があり、少ない項目として、「記憶力」33.6%、「心の安定」36.0%がみられた。保健体育の指導者を目指している者が多い専攻ではあるが、一年生でありまだ指導力に自信が持てるに至っていないといえよう。劣っていると答えた者が多い項目は、「決断力」「持続力」共に16.1%であった。文科系男子では、優れていると答えた者が多い項目として、「感受性」54.1%、「想像力」52.6%、「知識力」50.3%があり、少ない項目として、「指導力」17.3%、「持続力」22.4%、「決断力」25.9%がみられた。劣っていると答えた者が多い項目は、「持続力」37.8%、「指導力」33.2%であった。

両専攻男子の意識を比較すると、優れていると答えた者の占める割合では、17項目中「意志力」「決断力」「行動力」「集中力」「持続力」「適応力」「協調力」「指導力」「理解力」「洞察力」の10項目において、体育専攻学生の方が文科系専攻学生より有意に多った。一方、劣っていると答えた者の占める割合でも、「意志力」「決断力」「行動力」「集中力」「持続力」「適応力」「協調力」「指導力」「心の安定」「自制心」の10項目において、文科系専攻学生の方が多かった。「記憶力」「知識力」「感受性」「想像力」「正義感」の5項目においては、意識の差は認められなかった。

女子の場合、回答パターンは、両専攻とも項目によって多様であると共に類似した発現傾向を示し、両者の回答パターンに有意な差が認められたのは「意志力」「持続力」「指導力」「想像力」の4項目のみであった。これらも、両専攻固有の回答パターンがみられるわけではなく、項目ごとに異なった回答傾向を示した。

項目別に両専攻の特徴をみると、体育系女子では、優れていると答えた者が多かった項目は、「感受性」63.0%、「適応力」60.4%であり、少なかった項目として、「心の安定」22.6%、「記憶力」27.8%、「決断力」31.5%、「知識力」31.5%であった。劣っていると回答した者が多かった項目は、「心の安定」20.8%、「決断力」20.4%であった。文科系女子では、優れていると答えた者が多かった項目は、「想像力」66.7%、「感受性」61.6%、「適応力」53.5%で、「知識力」50.6%であり、少なかった項目は、「指導力」19.5%、「決断力」25.3%であった。劣っていると答えた者の多かつ

た項目は、「決断力」34.5%、「指導力」34.5%、「心の安定」31.4%、「持続力」31.0%であった。

両専攻の女子を比較すると、項目ごとに「優れている」者の占める割合を比べると、「行動力」「集中力」「持続力」「指導力」の4項目で体育系学生の方が有意に多かった。しかし、前述までの身体面での男女及び精神面での男子の傾向とは異なる結果として、「記憶力」「知識力」「想像力」の3項目において、文科系学生の方が有意に多かった。「劣っている」と答えた者の占める割合を比べると、「意志力」「持続力」「協調力」「指導力」の4項目において、文科系学生の方が有意に多かったが、「想像力」においては体育系が有意に多かった。

精神面での意識の実態では、男子の場合は体育専攻学生が全般にかなり優位意識を持っていることがわかったが、女子の場合は項目によって傾向が異なり、必ずしも差があるとは云えないことがわかった。

### 3. 社会面について

大学生自身の、社会面の健康状態に対する意識を捉えた結果がTable 3である。

この意識は、「境遇」に関する10項目について、「一般の大学生」を基準にして、それらの優劣をイメージ的に比較させることによって、捉えたものである。

男子の場合、回答パターンにおいて、体育専攻学生と文科系専攻学生の間には差がみられたのは、10項目中の7項目であった。この7項目は、「学習に関する諸条件」「住居に関する諸条件」「友人関係における諸条件」「課外活動における諸条件」「通学に関する諸条件」「家族関係における諸条件」「娯楽に関する諸条件」であるが、両専攻学生とも回答パターンはいずれも「優れている」者の占める割合が最も高く、次いで「普通」「劣っている」「わからない」の順では変わりはなく、それぞれが占める割合に差がみられた。

項目別に両専攻の特徴をみると、体育系男子では、優れていると答えた者が多い項目として、「通学に関する諸条件」81.8%、「家族関係における諸条件」78.8%、「友人関係における諸条件」78.1%であり、かなりの高率である。通学については、学寮が完備していることなどが主な理由と思われる。優れていると答えた者が少ない項目は、「経済的な面」41.6%、「娯楽に関する諸条件」43.1%であった。劣っていると答えた者が多い項目は、

Table 3 Health Consciousness — Social Aspect —

(%)

	男 子								女 子											
	優れている		普 通		劣っている		わからない		X <sup>2</sup>		優れている		普 通		劣っている		わからない		X <sup>2</sup>	
	体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科			体育	文科	体育	文科	体育	文科	体育	文科		
学習に関する諸条件	55.5	53.8	30.7	33.5	8.8	12.2	5.1	0.5	*	63.0	56.3	27.8	33.3	7.4	8.0	1.9	2.3			
住居に関する諸条件	60.6	42.6	24.1	37.6	13.1	18.3	2.2	1.5	*	57.4	56.3	31.5	24.1	9.3	16.1	1.9	3.4			
友人関係における諸条件	78.1	62.9	18.2	29.4	3.6	4.6	—	3.0	*	81.5	78.2	14.8	19.5	1.9	1.1	1.9	1.1			
課外活動に関する諸条件	64.2	46.2	26.3	34.5	8.8	13.7	0.7	5.6	**	79.2	55.2	13.2	32.2	5.7	9.2	1.9	3.4	*		
経済的な面	41.6	33.0	45.3	44.7	11.7	19.8	1.5	2.5		47.2	48.3	41.5	35.6	7.5	11.5	3.8	4.6			
通学に関する諸条件	81.8	44.2	12.4	35.0	5.1	20.8	0.7	—	**	77.8	51.7	20.4	29.9	1.9	17.2	—	1.1	**		
家族関係における諸条件	78.8	60.9	16.1	29.9	4.4	8.1	0.7	1.0	**	85.2	70.1	7.4	14.9	7.4	13.8	—	1.1			
娯楽に関する諸条件	43.1	51.3	33.6	37.6	21.9	9.6	1.5	1.5	*	37.0	52.9	31.5	34.5	25.9	9.2	5.6	3.4	*		
医療に関する諸条件	62.8	49.7	27.7	37.1	7.3	9.6	2.2	3.6		75.9	65.5	20.4	25.3	1.9	3.4	1.9	5.7			
環境に関する諸条件	56.9	50.8	28.5	37.1	10.9	10.2	3.6	2.0		77.8	54.0	22.2	29.9	—	5.7	—	10.3	**		

○体育系：男子=137, 女子N=54 ○文科系：男子N=197, 女子N=87

\*P<0.05 \*\*P<0.01

やはり「娯楽に関する諸条件」21.9%であり、他の項目は少なかった。娯楽については、大学の所在地が発展途上の新しい街であり、近くに娯楽にはこと欠かない東京をひかえているために、このような意識を持つものと思われる。文科系男子では、優れていると答えた者が多い項目は、「友人関係における諸条件」62.9%、「家族関係における諸条件」60.9%であり、少ない項目は「経済的な面」33.0%であった。両専攻生とも友人や家族といった人間関係に恵まれて、生活している様子が窺える。

両専攻男子の意識を比較すると、優れていると答えた者の占める割合では、10項目中「住居に関する諸条件」「友人関係における諸条件」「課外活動に関する諸条件」「通学に関する諸条件」「家族関係に関する諸条件」「医療に関する諸条件」の6項目において体育専攻学生の方が有意に多かった。文科系学生が優位を占めた項目はなかった。一方、劣っていると答えた者の占める割合が有意に多い項目は、体育系の「娯楽に関する諸条件」と文科系の「経済的な面」と「通学に関する諸条件」であった。両者の意識に差が見られなかった項目は「学習に関する諸条件」と「環境に関する諸条件」である。

女子の場合、回答パターンに専攻差が認められたのは「課外活動に関する諸条件」「通学に関する諸条件」「娯楽に関する諸条件」「環境に関する諸条件」の4項目であった。しかし、両専攻とも「優れている」と答えた者が最も多く次いで「普通」「劣っている」「わからない」の順であり、それぞれの占める割合に差が認められた。

項目別に両専攻の特徴をみると、体育系の女子

では、優れていると答えた者が多い項目は、「家族関係における諸条件」85.2%、「友人関係に関する諸条件」81.5%、「課外活動に関する諸条件」79.2%、「通学に関する諸条件」「環境に関する諸条件」共に77.8%であり、何れもかなりの高率であった。優れていると答えた者が少ない項目は「娯楽に関する諸条件」37.0%であった。劣っていると答えた者が多い項目はやはり「娯楽に関する諸条件」で25.9%であった。文科系女子では、優れていると答えた者が多項目は、「友人関係における諸条件」78.2%、「家族関係における諸条件」70.1%であり、最も少ない項目でも、「経済的な面」48.3%であった。劣っていると答えた者が多い項目は、「通学に関する諸条件」17.2%、「住居に関する諸条件」16.1%であった。

両専攻の女子の意識を比較すると、優れていると答えた者の占める割合では、10項目中「課外活動に関する諸条件」「通学に関する諸条件」「家族関係における諸条件」「環境に関する諸条件」の4項目において、体育系学生の方が文科系学生より有意に多かった。文科系学生の方が優位な意識を示した項目はなかった。一方、劣っていると答えた者の占める割合では、「通学に関する諸条件」「環境に関する諸条件」において、文科系学生の方が有意に多かったが、「娯楽に関する諸条件」では体育系学生が多かった。通学や娯楽に関しては、男子と同様の傾向にあったが、環境に関しては女子の方が明確な意識を持っていた。なお、「学習に関する諸条件」「住居に関する諸条件」「友人関係における諸条件」「経済的な面」「医療に関する諸条件」の5項目においては、両者の間に差は見られなかった。

社会面での意識の実態では、男女とも、体育専攻学生が全般に優位な意識を持っていることがわかった。

#### IV. 結 論

体育及び文科系専攻大学生が、自分の健康状態に対してどのような意識を持っているか、身体面（11項目）、精神面（17項目）、社会面（10項目）から調査したところ、以下のようなことがわかった。

1. 健康の身体面に対する意識は、男子の場合、11項目中10項目に体育専攻学生が文科系専攻学生より、優位であった。女子の場合は6項目に体育専攻学生が優位であった。男女とも、文科系専攻学生が優位な項目は見られなかった
2. 健康の精神面に対する意識は、男子の場合、17項目中10項目に体育専攻学生が優位であったが、文科系専攻学生が優位な項目はなかった。女子の場合は4項目に体育専攻学生が優位であったが、文科系専攻学生も3項目に優位であった。
3. 健康の社会面に対する意識は、男子の場合、10項目中6項目に体育専攻学生が優位であった。女子の場合は4項目に体育専攻学生が優位であった。男女とも、文科系専攻学生が優位な項目はなかった。

実際の体力、精神力、境遇の実態が明らかにならないければ、これら大学生の健康意識の妥当性や

問題点を明らかにすることはできないが、本調査の結果からみて、文科系専攻学生に対しては、健康の3側面に対してバランスよく自信を持たせるような、保健教育及び保健管理的な働き掛けが必要と思われる。

#### 引用・参考文献

- 1) D. シュルツ (1982) : 健康な人格. 川島書店, 東京, pp. 251-256.
- 2) 藤沢邦彦 (1983) : 大学生の保健行動に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要 6 : 203-215.
- 3) 藤沢邦彦 (1990) : 大学保健教育における「健康論」の試み. 筑波大学体育科学系紀要 13 : 125-126.
- 4) 勝目卓朗 (1987) : 健康とは何か. 新興医学出版社, 東京, p. 144-145.
- 5) Kenneth L. J., Shainberg L. W. and Byer C. O. (1986) : Dimensions VI. Harper & Row, New York, pp. 5-28.
- 6) 健康・体力づくり事業財団 (1990) : 健康づくりに関する意識調査. 同財団, 東京, p. 39.
- 7) L.A. ラーソン他 (1976) : 運動処方ガイドブック. 大修館書店, 東京, pp. 13-36.
- 8) 島内憲夫 (1989) : 「健康」ライフワーク論. 垣内書店, 東京, pp. 91-97.
- 9) 上田吉一 (1969) : 精神的に健康な人間. 川島書店, 東京, pp. 25-67.
- 10) 上田吉一 (1976) : 自己表現の心理. 誠信書房, 東京, pp. 140-158.